

空



2004年

SORA 5号

晴夜 (5) | 2

柴田 佐知子

玄海の星凛々と
黼枕

海鳴りの参道長し
札納め

山門に雪の大路が
入りゆけり

正面に廻つてきたる雪女郎

雪見舟この世の端をめぐりけり

子はすぐにその地になじみ耳袋

考へる時間まだある着ぶくれて

くたびれし色に狸の飼はれをり

神 楽

苑 実 耶

柿紅葉泣きたいほどの空の青

一山に混じるものなし芒揺れ

九十の母の気配り柿熟るる

潮の引くやうに子の去る炬燵かな

松毬のままも混じれる炭をつぐ

松明に導かれたる里神楽



夜神楽や二間四方に舞ひ始む

神楽笛伊邪那岐伊邪那美酔うてをり

枇杷の花病院嫌ひの夫なりし

子の頬の冬帽子よりはみ出せり

正直が一番と言ひ着ぶくれし

山眠る山羊も羊も小屋の中

龍の玉母の愚痴など聞いてやる

雨の日の芥子利かせて花菜和へ

火を吐いて神楽の大蛇前へ前へ

柴田 佐知子

初めて手にした句集の中にあつた二句。その頃は、俳句に全く興味がなく、さらさらと読み終えてしまつたが、それでも「前へ前へ」という言葉に力を感じた。とぐるを巻いて対峙した二体の蛇が、威嚇しながらじりじりと間をつめていく。太鼓の効果音が聞こえ、戦いが始まる前の緊張感が伝わってくる気がした。「前へ前へ」を真似て数句作つたが、及ばない。同じ言葉の繰り返しは、永遠のテーマになりそうな気がする。

花八つ手

高倉恵美子

月明りたよりに稲架をかけしこと

銀杏や老婆は眠りつづけをり

落穂拾ふ姿もなくして不作なり

たんねんに鍬を洗ひし秋納め

彼岸まで迷ひてゆきし大花野

空広く使ひて鳥の帰りけり



あたたかき年となりたる神迎

誰彼の話してゆきし初炬燵

幼子のつまみてきたる枯蠮螂

日向ぼこ体ふはふはしてきたり

石仏の影のうすさや冬紅葉

病むことの多き余生や花八つ手

牛の仔に千の番号冬ぬくし

麦踏の終はり薄着となつてをり

春満月夫を起こして見てあたり

一年中山を見て暮していると、無性に海が見たくなることがある。思い浮かべるのは穏やかな青い海原だ。先日、誘われて鐘崎へ一泊することになった。寒さが気になったが、冬の海を見てみたい気持ちが大きく出かけることにした。

その日は朝からとても厳しい寒さで海も黒く荒れていた。今までの旅行で見えてきた海とはまったく違って見えた。翌日の朝はものすごい吹雪で、心配していると、このあたりは海風が強いので雪は積もらないという。もう少しこの荒れた海を見ていたかったが、帰り道が雪で通行止めになるかもしれないとのことで、吹雪の中、車を走らせた。途中、窓から見た海は恐ろしいほどすごい波をうならせ荒れていた。海辺の人たちの暮らしの厳しさを垣間見た気がした。

一塊

遠野 萌

押入れにへその緒ふたつ山眠る

毛布被る母一塊の石のごと

切り身にて売らるる大魚十二月

飾売り一間ほどを灯しけり

青ざめて竹林抜けし初詣

覗き込む顔尖りたる初氷



富士山の飛び出してきし初曆

冬眠の山白々とけもの道

絵馬堂にこぼれて散つて初雀

畳まれて花の混み合ふ屏風かな

通夜の座に盛られし蜜柑誰も触れず

犬小屋に陶の犬ゐて冬うらら

隧道の先にまあるい春の海

玄海に開けしままなる春障子

仁王見る怒りのいつかあたたかし

幼い頃、山の麓に嫁した叔母の家へ遊びに行った事がある。麓へ伸びる一本道の両側は見渡す限り菜の花畑であった。二時間程の距離は子供の足でも遠く、麓に近い橋の袂の、一軒家の大櫓が近づいて来ると、急に元気になっていた。帰る頃、月は真上に移り、むせかえる様な油菜の道。前も後も誰もいない。臆病な私は祖母の手をしっかりと握りしめていた。今では菜の花畑は家が建てこみ、当時の佛は橋の快の一軒家のみとなっていた。月夜と花菜道。今なら大声で歌っているに違いない。祖母もあの風景も遠い思い出となつてしまった。

何の木

中田みなみ

笹鳴に裁ち間違へて了ひけり

寒卵と聞きて殊更効きさうな

寒卵昔鶏絵の函ありし

バレンタインデー函に玉子の二列づつ

手を振りて作る笑まひや冴え返る

一本の山道見ゆる屋根を葺く



屋根替への声が空とぶ宿場道

葺き了へし屋根より離れ眺めをり

足湯して耳傾けし春太鼓

酔少し残りて鳥を見送れり

シラノの声待てる心地や春の闇

恋猫やてのひらに出す美顔水

行きずりに挿し直したる苗の札

何の木か思ひ出せない挿木付く

永き日の小耳に挟むゴリラの死

昭和五十一年から約九年間、「鳳」というささやかな超結社誌を隔月発行していたことがある。会員五十九名、影のパトロン数名で、会計は故安永佳江さん、編集後記は高千夏子さんをお願いしていた。当時は個人でワープロを所有していなかったから、二号までは手書きで、三号からワープロ印刷に託した。本印刷は高かったからである。依頼したエッセイが締切日が迫っても来ないこともあり、印刷屋の片隅で慌ててペンを執り身辺雑記で穴埋めしたり、また句会の折添削した作品は巻頭や次巻頭におくことを憚ったりで、何かと気を廻すことが多かった。お招きしていた西村公鳳先生が仙台に移られたのを機に解散し、それぞれの社に定着したが、未だ横の繋がりには緩まず、沢山の友情を得たことは私の生涯の最良の輝きと感謝している。「空」もスタートしたばかり。充実していくまでは大変でしょうが、心からの声援を送ります。